

ベルクソンの収縮概念

『物質と記憶』から『創造的進化』へ

濱田 明日郎

はじめに

ある意味では、私の知覚はそれ自体では数え切れぬほどの瞬間に分かれるものを、私の持続のただ一瞬間に収縮 *contracter* するものであるから、たしかに私のうちにあるわけだ。（『物質と記憶』,233）

たとえば視覚は、すなわち光は、物理学的にはただただ電磁波の振動である。しかし光は光である——すなわちわれわれにとって、光は、振動ではなく、色や明るさといった知覚経験である。かくして、物質と知覚とのあいだには曰く言い難いギャップがあるように見える。これをいかに思考するか。アンリ・ベルクソンは『物質と記憶』（以下 MM）第四章においてこのような問題に取り組み、収縮という謎めいた作用を持ち出すことになる。

上記引用の文脈では「知覚」における「収縮」が語られるが、実のところ MM では記憶の表象や行動化においても「収縮」が重要な作用であり、『創造的進化』（以下 EC）では芸術作品の創造の現場の記述にも「収縮」やそれに類する語彙が用いられている。しかしながら「収縮」にまつわる問題は、ベルクソンの事情から極めて込み入ったものになっている。

以下、本稿は、その重要性と複雑さを受けて、MM と EC とにおける収縮概念の連続的な読解を試みるものである。

1. 知覚における収縮

まず確認すべきは、上述したような物質と知覚の一致の問題、ないしは科

学的実在と知覚との一致の問題は、『物質と記憶』の純粹知覚理論によって解決されたはずのものである、という点である。

われわれの具体的知覚は、記憶の寄与や物質の寄与による混合体であるが、これを二極に突き詰めていくと、純粹記憶と純粹知覚という実在が同時に要請される。ここで、純粹知覚があつて具体的知覚がある、というロジックではなく、具体的知覚を分解していけば純粹知覚が見出せるのだ、というロジックであることに注意しよう。杉山[2006]によれば、「彼[ベルクソン]が論じているのは、人称性を帯びた知覚経験を一定の仕方で分解していけば、そこにはもはや私の主観的な経験とは言い難い一つの層が見出される（それが「純粹知覚」である）ということであつて、この層がそれだけで経験の人称化を構成したり、経験の主観的な諸要素すべてを導き出すといった議論は存在しない」（杉山,124）。あらゆる実在においてより微細な実在が次々と見出されるのは「全く自然」なことであろう。分解をなす科学と実在とは、われわれの感覚-運動的な「秩序」のもとに手を取り合っているのだから。「全く自然に」という彼[ベルクソン]の言葉は、実在の知解可能性に驚嘆するな、というメッセージ以外の何ものでもない」（杉山,236）。そして科学はわれわれに感覚可能なタイムスケールを大きく超えて突き進み、その莫大な構成要素を定位する。しかしわれわれはその数的な莫大さに驚くことはないはずだ——それが科学的に見出される限りは。だが、指摘しておくべきは、MM 第四章において、物理的実在の「莫大さ」に、ベルクソン自身がふたたび驚嘆しているように見える、ということである。本稿は、MM におけるこのねじれのようなものから出発する。

赤色光線——波長最大、したがって振動数最少の光線——は、一秒間に四〇〇兆回の継起的振動を生じている。この数をまざまざと思い浮かべようとすれば、私たちの意識がそれらを数えるかせめてその継起を銘記できるように、十分それらをお互いに引き離さねばならないであろうが、この継起が幾日、幾月、幾年かかるかをもとめるとしよう。さて私たちが意識する最少の空虚な時間は、エックスネルによると、五〇〇分の一秒である。（……）一言でいえば、ほんの一瞬のうちの四〇〇兆の振動の行列を見届けよう意識を想像してみよう *Imaginons* というわけであつて（……）ごく

簡単な計算でわかることだが、この操作の完了には、二万五千年以上もかかるだろう。このようなわけで、私たちが一秒間に経験する赤色光線の感覚は、(……)私たちの歴史の二五〇世紀以上を占めるような諸現象の継起に対応している。これは納得のいくことであろうか。(MM,230-231)

ベルクソンは、具体例として一秒間に四〇〇兆回振動する「赤色光線」を持ち出す。「振動数最少の光線」という挿入句は、オレンジ色、黄色、もっと高周波数である青色などについてはなおさら……という含みを持たせるものだろう。MM 第四章全体を見渡しても、この種の記述において、その大きさの数的な強調は著しい。上記パッセージからも、極めて数的なしかたでその経験を与え、感じさせ、その長さを確認し読者と共有しようとしていることがわかるだろう。しかし上述したように、ベルクソンは分解の結果には驚嘆しない。ベルクソンがここで促すのは、数的分割だけではなく、われわれのタイムスケールを持ったまま赤色光線のその莫大な振動数を経験してみること、その莫大な「長さ」を「想像」*imaginer* してみよ、というものである。要するに、ここでベルクソンは赤色光線を等質的分解による——したがって物質を扱う科学による——実在の理解とは異なった仕方で理解することをすすめている[1]。収縮・凝縮・縮約といった作用が想定されるのは、まさにこの文脈においてである。

歴史の全体は、私たちの意識よりももっと緊張した意識にとっては、ごく短時間に収まるものであって、そのような意識は人類の発展を、いわばこれを自己の進化の大いなる諸段階の中に収縮 *contracter* しつつ目の当たりにする *assister* のではなかろうか。だから *donc*、知覚するということは、要するに、限りなく希薄化された存在の莫大な諸時期を、より緊張度の高い生の、いっそう分化したいいくつかの瞬間に凝縮 *condenser* すること、こうして非常に長い歴史を縮約 *résumer* することにある。(MM,233)

後半部から読む。ここで、物質的な振動が「限りなく希薄化された」とされているのは、われわれが与えられた質を純粹知覚の方向へと探求した結果の実在だからである。このとき、「感覚的性質は消失しないまでも、比較にならぬ

ほど細分された持続へと広がり散ってしまう」(MM,233-234)。しかし、回顧してみよう、いまやかくして分解され、薄くなってしまった赤色は、かつてのわれわれにとっては、あの濃厚な赤色だったのであり、現に今もそうなのである。とすれば、ここにはその振動を一瞬のうちにまとめる作用が必要なのであり、それが収縮・凝縮・縮約と呼ばれているものの骨子である。

収縮という作用は、純粹知覚を突き詰めた果てで論理的・回顧的に要請された概念でしかなく、特段問いに付すべき概念ではないのだろうか。そうではない、と本稿は考える。「収縮」についての執拗で時に謎めいた記述は、それだけにはとどまらない何かを語らされている。さて、この引用部を三つの観点から探求しよう。第一に、この知覚についての「歴史」的記述がどのような事態を言っているのかということである。ここだけを見れば、記憶をある意味では排したはずの純粹知覚理論において、〈記憶における収縮〉のようなものをベルクソンは見出している。これはどういうことか。第二に、先程見たように、ベルクソンは赤色光線の「速さ」よりもむしろ「長さ」を強調し、これを「歴史」とさえ呼ぶのだが、これはそもそもどのようにして正当化可能なのか。第三に、前半部が何を言っているのか、ということである。人類の発展を自らの発達段階において短時間のうちに経験するような意識とは何なのか、そしてその意識の緊張感とはどのような観念なのか。第一のポイントは本稿第三節、第二のポイントは第五節、第三のポイントは第六節で扱うことになる。つづく第二節では、知覚における収縮概念をより具体的にイメージするため、そしてなぜ収縮概念にベルクソンが拘るのかを示唆するために、ある事例に寄り道しておく。

2. ギャロップ

馬のギャロップについてわれわれの眼がとりわけ知覚するのは、特徴的、本質的、いやむしろ図式的な姿勢である。ある期間全体に広がって、したがってギャロップの時間を満たしているように見える形態である。この姿勢を彫刻はパルテノン神殿のフリーズに固定したのである。しかし、瞬間写真 *photographic instantanée* [ここではシネマトグラフィ・連続写真の一齣

のことが念頭にある]は任意の瞬間を切り離し、それらすべてを同じ列に置く。こうして瞬間写真にとって、特権的瞬間において輝き、ある期間全体を照らしつくすようなただ一つの姿勢に馬のギャロップが集約される *se ramasser* ことはない。馬のギャロップは望まれるだけ多くの継起する姿勢に分散するのである。(EC,332)

EC 第四章「思考の映画的メカニズムと機械論の錯覚」において、ベルクソンがマイブリッジ的（そしてマレー的）な連続写真ないしはシネマトグラフィを科学的認識の産物と評した一方、絵画的・彫刻的な運動の凝縮としての「特権的瞬間」をこそ高く評価したことは比較的良好に知られていよう。MM 第四章でもほぼ同型の議論が、知覚と運動との一致としての収縮、についての文脈で展開されている。この二つの引用の類似は一読して明らかだろう。

私の意識と、あわせて生の要請とを回復してみるとよい。すると非常に遠い間隔において、事物の内的歴史の莫大な *énorme* 諸時期をその都度飛び越えながら、ほとんど瞬間的というに近い光景が得られていく。この光景は、いまや絵のような生彩を持つにいたり、ますます際立ってくるその色彩は、要素的な無数の反復と変化を凝縮 *condenser* している。たとえば一人の走者の相次ぐ無数の姿勢が唯一の象徴的態度に収縮 *contracter* され、これを私たちの目が知覚し、芸術が再生して、だれにとってもこれが走る人のイメージとなるようなものだ。(MM,234)

馬がギャロップを行う際、馬の前足が前方へ、後ろ足が後方へと伸びていることがあるか、という議論の決着は、1878年のマイブリッジの連続写真を待つほかなかった。というのも、馬のギャロップはわれわれの視覚の閾値を超えて運動するがゆえに、われわれのタイムスケールでは見切ることのできない運動だったのだ。運動の分割を行う連続写真が明らかにしたことには、それまでの西洋美術の表象の伝統を裏切り、空中の馬は、前足も後ろ足も内側へ向けている。しかしながら、ベルクソンがより本質的なものだとするのは、連続写真による分散ではなく、むしろ芸術家による収縮の方なのであった。「馬のギャロ

ップについてわれわれの眼がとりわけ知覚するのは、特徴的、本質的、いやむしる図式的な姿勢である」。MMの議論では、科学的実在というものがあるとして、それは感覚-運動的な秩序をひたすらマイクロに突き詰めた、驚くに値しないはずの実在である。ベルクソンにとって、マイブリッジの「発見」に際して真に驚くべきは、馬の運動をあのよう^にに結晶させていた収縮の作用と、そこに見出されたヴィジョンである。MMの議論にもこの図式を見ることは可能だろう。赤色光線の四〇〇兆回という数をベルクソンが強調するのは、振動の実在そのものではなく、その莫大なはずの振動がわれわれにはこのように収縮されて見えている、というヴィジョンに、ベルクソンが驚くからである、と考えることはできよう。

上述したような科学的分割に対するそっけなさと、収縮とその結果に対する高い評価の内実は、本稿第六節で扱う運動の二方向の評価と関係するものである。

3. 記憶における収縮

『物質と記憶』における収縮概念に戻る。「存在の莫大な諸時期」，「非常に長い歴史」，といった表現に着目してみれば，読者は次のような疑問に駆られるかもしれない——ベルクソンは，記憶を排して解明したはずの瞬間的な知覚の場で，どういうわけか再び記憶についての思考を持ち出しているかのようである。ベルクソンは物質と記憶という二極を提示しておきながら，物質を記憶のように語っているのではないか——と。ある意味ではおそらくその通りなのである。本節は，〈記憶における収縮〉の概念と，〈知覚における収縮〉との関係を見る。

特定の朗読の記憶は表象であり，また表象にすぎないのだ。それは，私が好きなように伸縮させることのできる精神の直観のうちに含まれている。私はそれに任意の持続を帰するのである。私がこれを，ちょうど一幅の絵画 *tableau* におけるように一挙に総括 *embrasser* することを，何物も妨げるものはない。（MM,85）

ベルクソンはMM第二章で「第一の記憶力」と「第二の記憶力」とを区別する。ここで挙げられる「朗読」の例で概説しよう。ある一文の朗読を百度繰り返す、その文を暗唱できるようになったとする。いまやこの文は、「表象されるというよりは、むしろ生きられ、「行動される」のだ。——もし同時に、私がそれを習得するのに役立つつぎつぎの朗読を、それぞれ表象として楽しく思い起こすということがなければ、私はそれを生得のものと思ひこむ」(MM, 同上)であろう。これが第一の記憶力に属するものである。一方、ここで言われる「つぎつぎの朗読」は「第二の記憶力」に属する。これは、私の「位置と日付」(MM,86)を持った表象であり、生得のものではなく、「私の歴史の還元不可能な一瞬を構成する」(MM,85)ものである。

第一の記憶は「行動」に属する以上、これを再生するには、「はっきりと一定の時間を必要とする」(MM,95)、換言するならば「私の現在」(cf.MM,153)という一定の持続を必ず必要とする。それに対して、第二の記憶については、上掲した通り、一定でない「任意の持続」において再生することができる。たとえば、子供のころ目にしたあの輝かしい光景たちを、われわれはスローモーションのようにじっくりと再生することもできるし、フラッシュバックのように、ほぼ瞬間的に・一気に再生することもできる。「好きなように伸縮させること」という記述は、第二の記憶をわれわれがさまざまな倍率のタイムスケールに収縮し、表象することを示し、このことは諸層を持った記憶力の逆円錐図(MM,181)として図式化される。さらには、このような記憶が行動へと移されるとき、この第二の記憶力の最高度の収縮が起こる。ただし、このとき、この第二の記憶力が(第一の記憶力が活躍するような感覚-運動系ではなく)いわば観念-運動系に属することに注意しよう。

(……) これらの記憶が運動に、したがって外的知覚に近づくにつれて、記憶力の働きはますます高度な実的重要性を獲得する。(……) 行動するということは、とりもなおさずこの記憶が収縮する *cette mémoire se contracte*, より正確には研ぎ澄まされる *s'affile* こと、ついには経験にその鋭利な刃のみを差し出して切り込むまでにいたることにほかならない。(MM,116-117)

まとめよう。振動の莫大な歴史を収縮するのとある意味では同様に、われわれは個人的で莫大な歴史を収縮しているのである（このことは、ギャロップの例・走者の例とも似て、「第二の記憶力」において「絵画」の比喩が用いられていることから示唆される）。どのような意味において同様なのか。私の行動へと差し入ること、そのために「私の現在」という短い瞬間へと、その全体性を保持しつついわばスケールダウンする、という意味においてである。〈知覚における収縮〉と、（第二の）〈記憶における収縮〉の「収縮」の意味はここで一致する。

4. 「記憶力による収縮」について

本稿では、ベルクソンのテキストに見られる上述したような二つの収縮を、その内実を鑑みて、〈知覚における収縮〉／〈記憶における収縮〉と呼び分けつつ、その収縮の二義性が、「私の現在へのスケールダウンを行う」という意味では一義性を持つことを述べてきた。ここで、このような見通しの先行研究との差異を明らかにしておくと同時に、本稿の区分の正当化を図りたい。

われわれが〈知覚における収縮〉と呼ぶものは、ベルクソン自身によってしばしば「記憶力による作用」として描かれる。

知覚はどんなに短くとも、つねになんらかの持続を占めるものであり、したがって、多数の瞬間を互いに他へと延長する記憶力の努力を要求する。のみならず *Même* , 後ほど明らかにしようと思うが、感覚的性質の主観性は、とりわけ、私たちの記憶力による一種の実在の収縮 *espèce de contraction du réel, opérée par notre mémoire* からなっている。要するに記憶力は、直接的知覚の素地[純粹知覚]を記憶の布で覆う[第二の記憶の作用]限りにおいて、同時にまた多数の瞬間を収縮する[第一の記憶の作用]限りにおいて、この二つの形式のもとで、知覚における個別的意識の主な要因、すなわち事物についての私たちの認識の主観的側面を構成するのだ。（MM,30-31）

ドゥルーズ[1966]は、本稿が〈知覚における収縮〉／〈記憶における収縮〉と区分する作用を、記憶力-回想 *mémoire-souvenir*／記憶-収縮 *mémoire-contraction* と呼び分けているように思われる。また、岡嶋[2016]は、この二つの作用を「現実化」と「収縮」と呼び分けている。ところで、本稿で着目するのは、ドゥルーズが「記憶力-回想」と呼び岡嶋が「現実化」と呼ぶ作用についても、「収縮」という表現が用いられていることである。確かに、MM 第二章・第三章での「収縮」（すなわち〈記憶における収縮〉）と、MM 第一章・第四章での「収縮」（すなわち〈知覚における収縮〉）とは差異があり、また収縮 *contraction/contracter* という語の使用は第一章・第四章に集中していることから、第二章・第三章での記憶の作用を第一章・第四章での収縮の作用と区別して「記憶力-回想」、「現実化」と呼ぶことは正当である。しかし本稿ではあえて二つの収縮の一義性に固執する。ベルクソン自身の表現に一貫性を見出すべきであるということもあるが、より大きな問題として、ベルクソン自身の「記憶力による収縮」という表現が、つまるところわれわれには不分明に思われるからである。

ベルクソンが「記憶力による収縮」という時、この「記憶力」を「第一の記憶力」として用いていることは疑いえない（〈知覚における収縮〉に「第二の記憶力」は関わらない）し、平井[2016]が詳細に論じるように、収縮において、私の現在が持続しているあいだ対象の振動が続いていることは必須である——つまり、「物質システム自身が保持しないはずの、先行する諸瞬間を何らかの形で保持し、システムに組み込むための」（平井,185）記憶力が何らかの形で必要とされる。〈知覚における収縮〉において、「私の現在」のあいだ振動を保持するための記憶力が必要条件であることは間違いないだろうし、ベルクソン自身も記憶力をそのように表現することがある（「ある独特な種類の努力があって、そのおかげで私たちはイマージュそのものを、限られた時間、意識の視界に保持することができる」MM,91）とはいえ、「保持」する限りでの記憶力の作用のみによって、「収縮」という作用を説明することは難しい。収縮に記憶力が必要なのはよいとして、記憶力が収縮を行うということが不分明なのである。〈記憶における収縮〉においては、前掲のように「第二の記憶力」が自ら収縮する *se contracter* という記述が見出されるために、この自発的な作用が「第一の記憶力」にも付されているのではないか、というアイデアは、「記憶力

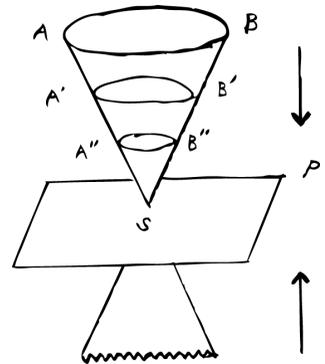
による」opérée par notre mémoire という表現に裏切られる。そもそも、記憶力が自らを収縮する、ということ自体、相当に謎めいたことではないか。類似する「凝縮」等といった作用も、それがどのように記憶力に駆動されているのを見極めるのは難しいだろう。本稿が知覚において働く収縮を「記憶による収縮」として規定を行わなかったのは、このような不明明さが一つの理由である。

〈知覚における収縮〉／〈記憶における収縮〉という区分を採った積極的な理由としては、二つの収縮を「私の現在」へのスケールダウンという点に絞ってそれらを一義的に読むことで、等しくそれらを要請しているはずのものに注目することが、MM の読みにとっても生産的であり、EC にとっても「収縮」概念における接続を容易にすると考えるからである。二つの収縮のどちらをも駆動するものの様相がわかれば、そののちに、どのような思惑をもってMM ではそれが記憶力と記述されるに至ったかを求めればよい。本稿はこの方向をとり、その呼び分けには〈知覚における収縮〉／〈記憶における収縮〉という語を用いて、収縮されるものとしては純粹記憶と純粹知覚という二極を想定し、「私の現在」へのスケールダウンという意味では一義性を持つものとするのである。

5. きわめて条件法的な解決

一旦、これまでの議論を MM の全体の構成という観点から整理しておこう。

MM 第一章は、(第二の記憶としての) 記憶を排した感覚-運動の平面、「私の現在」の平面、「瞬間的な」イメージの平面(平面 P) が語られる。MM 第二章・第三章によって記憶・記憶力が導入され、有名な逆円錐の図が登場する。私の記憶は私の現在、感覚-運動的な身体を離れたところに実在し、収縮の働きによって自らを表象させたり、行動に利用されたりするのである。MM 第四章では、「私の現在」よりも素早く継起する科学的実在と、「私の現在」においてもそれを感覚-運動の「栄養」(MM,280) となすための収縮の概念が語られる。純粹知覚を突き詰めていく科学の成果によって、「私の現在」を超えてはいるが、実在として認めら



れる振動が現れる。このことを図式的に示すことを試みれば、図のようになろう。上下から伸びる矢印は、それぞれ〈知覚における収縮〉、〈記憶における収縮〉（見た目上のことであれ）想定したものである。つまり、権利上想定される純粹知覚と純粹記憶の底のことを鑑みれば、われわれの収縮には二方向がある。

さて、純粹知覚理論を認め、私のタイムスケールを超えた振動を超えた実在を認め、そこに「莫大な歴史」を見ることが、スケールダウンとしての収縮というアイデアに必須なのだった。これはどのようにして可能なのだろうか。実は、この問いに対して用意される MM の解答は、それまでの実証的・経験的な記述を離れ、驚くほど抽象的、条件法的なものである。

実際は、持続の唯一のリズムがあるのではない。ひとは異なった多くのリズムを想像することができる *on peut imaginer* し、それらはより緩慢 *lent* であるか速やか *rapide* であるかによって、意識の緊張 *tension* あるいは弛緩 *relâchement* の度を測り *mesuraient*、またそのことによって存在の系列におけるそれらの各々の位置を定める *fixeraient* だろう。（MM,232）

さてもし *si* すべての具体的知覚が、どんなに短い場合を仮定しても、すでに、相継起する無数の「純粹知覚」の、記憶力による総合であるとするれば、感覺的諸性質の異質性[意識に与えられるヴィジョンのこと]は、私たちの記憶作用におけるそれらの収縮によるものであり、客観的諸変化の相対的等質性[「物質」と呼ばれたものの特性]は、それらの自然な弛緩から由来すると考えるべきではなからうか *ne doit-on pas*?（MM,203）

MM において、われわれの持続とは異なる持続のリズムの相違や、持続の緊張と緩和によって精神から物質までの存在論を語るとき表れる、「想像する」、条件法的な「…だろう」、もしくは自問のような「～ではなからうか」といったベルクソンの控えめな態度は強調されてしかるべきである。後年の講演「形而上学序説」でも、ベルクソンは「本当は、われわれの持続以外に持続は実在しないのかもしれない」（『思想と動くもの』,210）と語り、私の持続ではない

持続の存在に対して慎重な態度を崩すことはない。このことは、経験的な記述にとどまる限り、ベルクソンがあくまでこの持続に絶対的な持続を見出し、その他の事物における持続・意識については一旦は保留せざるを得ないことによる。

しかしこの「想像」を押し進め、持続の緊張度の差異を語る時、もはや「物理的な振動の収縮」があるのではなく、収縮されていたものの弛緩体としての振動がある。この理論は同時的・相補的であり事後的ではない。振動があり、それからわれわれがそれを収縮したのではなく、端的に収縮した持続があり、その弛緩体が振動なのだ。こうして意識と物質は持続の収縮と弛緩によって連続することとともに、われわれの意識＝持続は本性上「収縮」であることが導き出される。

弛緩体（物質）の方に目を移そう。私ではない持続を認めるという条件のもとでこそ、驚きをもって物質の振動の「莫大さ」は見出される。再び引く。

一言でいえば、ほんの一瞬のうちの四〇〇兆の振動の行列を見届けるような意識を想像して *imaginer* みようというわけであって（……）ごく簡単な計算でわかることだが、この操作の完了には、二万五千年以上もかかるだろう。このようなわけで、私たちが一秒間に経験する赤色光線の感覚は、（……）私たちの歴史の二五〇世紀以上を占めるような諸現象の継起に対応している。これは納得のいくことであろうか。（MM,231）

なぜ二五〇世紀がかかるといえるのか。なぜ振動が歴大な「歴史」たりえるのか。それは、ベルクソンがその持続を分割することだけでなく、弛緩した持続を実際に生きることをも想定しているからである。そんなことが可能なのだろうか。しかしベルクソンは想定している———というか要請している、それが持続である以上、それを生きる意識とその「内部的緊張」があることを。つまるところ、ベルクソンは振動に、物理学の実践が明らかにした権利上可能な数的莫大さではなく、そこから想像される、絶対的・時間的な生きられる持続の莫大さを認めているのだ。繰り返しになるが、このような発想がなければ、そもそもベルクソンは科学的実在ごときに「莫大さ」を見出すことはなく、した

がって「大きな」スケールのを私の現在という小さなスケールに合わせて縮小すること、すなわち「収縮」という観念はありえない。

このように持続の存在論に基づいて想定された「収縮」の概念は、それでも最終的にはわれわれの記憶力に回収されているように思われる。「意識の開花」を扱い、ECの内容を先んじて垣間見せるようなMMの結部から引く。

私たちはこの意識の開花を目の当たりにすると同時に、どんな単純な形にせよ自発的で予見不可能な運動能力を持つ生活体が、姿をあらわすことをみとめる。(……)空間における運動にゆだねられる範囲がますます増大することは、じっさい、だれの目にも見えることである。誰も見ないのは、時間における意識の緊張が増大しつつそれに伴うことだ。(a)この意識は、すでに過去のものである諸経験を記憶することによって、過去をますます保持しつつ、現在と組織的に結合してより豊かな新しい決断を行おうとするばかりでなく、いっそう強度な生を生き、(b)直接的な経験を記憶することによって、ますます多数の外的瞬間を現在の持続のうちに収縮しつつ、より以上に行為を創造することができるようになる。(MM,280)

本稿の立場からすれば、(a)〈記憶における収縮〉の能力と(b)〈知覚における収縮〉の能力が相補的に高まることによって、われわれの行為がより創造的になる、ということが言われているが、パッセージの上では、この相補的な高まりを保証するのは「意識の緊張」の増大であり、これは記憶においても知覚においても過去の増大、記憶の増大である(「過去」と「直接的過去」を「記憶することによって」起こる事柄である)とされる。このことから伺えるのは、MMでは、意識の緊張の増大が過去の増大とある意味で同一視され、このような意味でこそ、収縮は記憶力の作用と呼ばれた、という消息である。すなわち、私の記憶力は現在の緊張度を高め、現在の緊張度の高まりは収縮を行う、この意味で、収縮は記憶力の作用なのだ。しかし、第四節でも検討したように、このようにして「意識の緊張」を含意しながら用いられる「記憶力」という表現にはやや負荷がかかってはいないだろうか。なぜこのような記述になるのか。その理由は以下のように推測される——ベルクソンは、MMでは、いまだ私の

持続と私の記憶力に重心を置き、私が自らの「リズムを手放した」持続の収縮と弛緩については、条件法的にしか語れなかった。そのために、収縮と弛緩とがむしろわれわれの諸持続、諸存在を規定する運動であることを予感しながらも、私の持続を中心とした記憶と知覚との様相を記述するMMの射程範囲では、それらのまとめ上げを私の持続としての私の記憶力に帰するほかになく、「記憶力による収縮」という記述に至ったのではないかと。とすれば、このような収縮をめぐる記述の複雑さは、私の持続と宇宙の持続とを、創造の名のもとに肯定するECにおいてこそ軽減され、具体化されるはずである。また、MMで収縮の端緒としても扱われた「生の要請」（MMにおいてははまだマジックワードのようにも思われる）も、ECにおいては生命の創造としてその内実を伺うことができる。以下は、MMが示した収縮という運動を、ECの上昇運動に接続して論じることで、その読解可能性を広げようとする試みである。

6. 上昇

宇宙は持続する。（……）科学によって限定されたシステムが持続するのは、それらが宇宙の残りの部分と分かちがたく結ばれているからに他ならない。確かに、後述するように、宇宙そのもののうちに、「下降 *descente*」、 「上昇 *montée*」という二つの相反する運動を区別しなければならない。前者の運動は、すっかり書き上げられた巻物を広げているだけである。この運動は、ぜんまいが緩む *détendre* ときのように、ほとんど瞬間的に行われうるだろう。しかし後者の上昇という運動は、成熟、創造といった内的な働きに対応していて、本質的に持続し、前者の運動に自分のリズムを押し付ける *imposer*。こうして下降の運動は上昇の運動と切り離せないものとなる。（EC,11）

すでに述べたように、物質には幾何学が詰め込まれており、下降する *descendre* 実在である物質は、上昇する *monter* ものとの結びつきによってのみ持続するのである。しかし生命と意識はこの上昇そのものである。それらの運動を採用して、いったん生命と意識をその本質において捉えるとき、実在の

残りがどのようにしてそれらから派生するのかが理解される。(EC,368)

ECでは、宇宙が持続する。それが言えるのは、宇宙にあるあらゆるものの時間とわれわれの意識の「待ち切れなさ」が絶対的な仕方です。時間を共有するから（「私は砂糖が溶けるのを待たねばならない」(EC,9)から）であり、そう考えれば宇宙の側がそれ自体「おそらく意識のように進展する」(EC,10)はずだからである。こうして、MMでは「想像」にとどまっていた持続の存在論は、ECにおいて生命論・創造論という形で確信されるに至る。われわれの感覚に捉えられる水・砂糖・私といった個物は、「切り取られた抽象」(EC,同上)ではないのだ。このようにあらゆるものが持続するとき、宇宙の上昇運動と下降運動が語られる。持続は上昇の運動であり、生命の働きであり、創造の働きである。したがってMMでは語られなかった「生の要請」の内実は、ECにおいては生命力の要請であり、生命力の要請とは創造である。持続とは本性的に「不可逆的」(EC,6)で創造的である（「時間は発明であり、そうでなければ何物でもない」(EC,341)）。さて、持続を上昇運動・生命力・創造の運動と見たとき、下降運動はその持続の分散であり、物質化の「傾向」(EC,10)である。物質は坂を「下る」かのような運動、すなわち下降運動であるが、「生命のうちには物質が下る坂をさかのぼる remonter 努力がある」(EC,246)。生命体とは、物質という下降運動と生命力という上昇運動の結晶であり、生命力そのものは、「みずからを解体するもの[物質]を横切つてみずからを作る、ある實在」(EC,248)である。

生命全体のエネルギー、生命の創発といったレベルで考えれば抽象的で壮大にも見えるが、現にこの創造の運動に立ち会い、巻き込まれているのもわれわれなのであり、私の意識の持続とは創造なのである。

これまで一度も知覚されておらず、と同時に、単純なものは必然的に予見不可能である。われわれの状態のそれぞれが、展開する歴史の瞬間として考えられる場合がそうである。それは単純で、以前知覚されたことのあり得ないものだ。なぜなら、それは知覚されたものすべてに加えて、現在がそこに付け加えるものをも、不可分なものとして濃縮させる *concentrer* か

らだ。それは比類ない歴史の、同じく比類ない瞬間なのである。(EC,7)

「知覚されたもの」、記憶と、「現在がそこに付け加えるもの」、知覚の濃縮体としての、われわれの「比類ない瞬間」。この文脈で、ベルクソンがまたしても「絵画」と芸術家の比喻を用いることに注意しよう。「われわれがその作者である、われわれの生の各瞬間」は、それは芸術家が絵画という形態をなすような「ある種の創造」の努力の成果とされる(EC,6-7)。MMに投げ返すなら、行動する「私の現在」への記憶と知覚の収縮は、自由な行動を生み出す創造行為へと向かうものである。

このような観点から見たとき、MMにおける収縮とは、下降運動をするものを「自らのリズムを押しつけて」上昇運動に巻き込むものであろう。この唐突な「リズム」は、MMで言われたところによると意識の緊張の度合いを示し、諸存在の階層のスペクトルを示すものである。ここでMMの謎めいたパッセージを回収しておこう。「歴史の全体は、私たちの意識よりももっと緊張した意識にとっては、ごく短時間に収まるものであって、そのような意識は人類の発展に、いわばこれを自己の発達の主だった諸段階の中に収縮しつつ立ち会うのではなからうか」(MM,233)。MMの結論部で語られる「私たちの意識よりももっと緊張した」意識は、ECの観点から読むならば、意識のように進展する生命の持続であり、意識のように進展する宇宙の持続である、ということになる。この生命は、われわれが赤色光線の長い歴史を一瞬で収縮するように、われわれの人類史を収縮して経験するのではないか。われわれの人類史は、生命全体にとっては一瞬で過ぎ去るものなのかもしれない。持続の緊張度による上方と下方のヒエラルキーは、そのまま収縮能力のヒエラルキーを指し示し、私の持続はより全体的で強度の高い持続の上昇運動に導かれている、ということになる。リズムの「押し付け」、「支配」、上の持続によって下の持続が説明されるというヒエラルキー、こうした上昇運動の一種暴力的ともいえるシステムは、しかし自らの持続からすべて導き出されたものである。もしこれを否定しようとするならば、ベルクソンにとってはそれは、そのまま生命の否定であり、持続の否定であり、要するに自己否定に陥ることに他ならない。

生命体のうちに、上昇運動と下降運動、MMの言葉では持続の収縮と弛緩との相反する二方向の運動があり、しかし下降運動-弛緩を引き連れていくしかない上昇運動-収縮がある。上昇運動は持続の实在から所与であり、それ自体の正当性を問う必要はない。とすれば、さらに進んで、そもそも、なぜ私たち生命体が下降運動としての物質と上昇運動としての生命力とにかかわらずらうのか、そのことは上昇運動にとって必然的なことなのか、これを問うならば、これに対するベルクソンの答えは淡泊なものであるだろう——それは偶然である。すなわち、われわれは生命体だからこそこのような形で生命力を知ってきたが、生命力自身は別に生命体にならないでいることもできる——と。

生命が、他の惑星で、また他の太陽系でも、われわれには全く思いもよらぬ形態で、われわれの生理学から見れば、生命が絶対的に嫌がるように見える物理的諸条件の下で展開していてもおかしくない。（……）もっと先へ進もう。生命は、みずからを集中させ、正確にして、厳密な意味での有機体になる必要さえない。つまり、エネルギーの流れに、弾力的ではあるが一旦出来上がった水路を差し出す、決まった物体[生命個体のこと]になる必要さえない。（……）この曖昧で輪郭のはっきりしない生命性と、われわれが知っている明確な生命性のあいだには、われわれの心理的生における、夢を見ている状態と目が覚めている状態の間にあるもの以上の差異はほとんどないだろう。（EC,257）

すなわち、ベルクソンにとって、「たとえ私の意識を消し去っても」宇宙が「あったがままに存続する」（MM,233）ことの裏返しのように、生命体を消し去っても生命力は持続する。この宇宙ではたまたま生命力は物質という「障害」に出会い、生命体となった。物質的な障害に出会わなければ、生命エネルギーはひたすら爆散するのみである。生命力のみがある場合と、生命体がある場合では、現勢化しているか否かの違いがあるだけで、それらは夢を見ているか目が覚めているかという程度の差異である。われわれは、たまたま物質的制約のもとで生命の歴史が「凝縮」した（EC,5）ものであるから、収縮、すなわち「下降運動するものを引き連れつついかに上昇運動をなすか」ということが問題に

なるのだ。

7. 結論

まとめよう。MMにおいてベルクソンの「収縮」ないし「縮約」という語は、「私の現在」、私の瞬間へのスケールダウンをこそ表す。行動する私の現在のごくわずかな持続にとって、赤色光線の歴史も、私自身の持続の歴史も、ある意味では同じように、絶対的・時間的に莫大なのである。そうでなければ、これらは純粹知覚の方向への探求によって単に知解され、想定されるに留まるはずのものであり、ベルクソンが収縮という概念を持ち出した理由が説明できない。さて、これらの「歴史」を私の現在の「生の要請」により用いるとき、収縮の概念が用いられるのである。われわれは、ベルクソンの逆円錐の図に書き込みを加え、収縮が現在の私にとって二方向から行われることを示した。一方は純粹記憶のスケールダウン、一方は純粹知覚のスケールダウンである。この両者は、ベルクソンのテキストにおいては「(第二の) 記憶の収縮」と「(第一の) 記憶力による収縮」とも呼ばれるものだが、本稿ではこれらの内実を鑑みて〈記憶における収縮〉〈知覚における収縮〉と呼んできた。「記憶力による収縮」は難解な概念だが、記憶力は「第一の記憶力」における保持能力として、そして意識の緊張度に寄与するものとして、収縮にかかわる、ということは言う。これが第五節までの内容である。

第六節からは試論的に、この収縮概念をECの「上昇運動」と接続して論じた。「生の要請」とは、生命の本性、持続の本性たる創造の要請であり、上昇運動の要請である。この上昇運動によって、あらゆる物質の持続が保証されるが、これは上昇運動が下降運動に転じたものとして物質を捉えるからであり、持続の弛緩体として物質を捉えるからである。さて、われわれが弛緩体たる物質を収縮するのは、われわれが下降運動する物質にあらゆる意味で構成されながらも生命力を持ち、上昇運動を行わねばならないからである。このようなとき、われわれは「私の持続のリズム」を弛緩体＝物質に強いて支配しつつ、自由な行動の範囲を広げるのである。純粹記憶の収縮と純粹知覚の収縮は、われわれの実践においては二方向の作用であるが、収縮を上昇運動の創造的な作用

ととらえれば、その目的からして上方への一方向的な作用なのである。

さて、ベルクソンにおいて、物質の存在理由は生命にあるが、この二者のあいだにあるギャップの存在理由は何だろうか。収縮という作用はまさにこのギャップに係っているのだから、それを問わなくてはならない。この問題は『宗教と道徳の二源泉』（以下 MR）に、「なぜ神はこの宇宙を創ったのか」という形で引き継がれてもいよう。ベルクソンはみずから「『創造的進化』での結論を越え」（MR,272）、「神秘家の直観」（MR,273）を借りながら、創るものと創られるもののギャップについて語ることになるが、この点については稿を改めたい。

註

[1]. 「『物質と記憶』第四章でベルクソンは、知覚を彩る「感覚質」と科学が示す「運動」とを結びつけようとするが、それは両者が数的に同一でありうるのはいかにしてか、という形で論じられるだろう。(……) 数的に同一でありながら異なる相感を持つ「感覚」と「運動」をいわばその場で直ちに結びつけるために、ベルクソンは「持続のリズム」の差異、あるいは「収縮」「凝縮」による運動の感覚化、といった観念に導かれたのである」(杉山[2006],第二章第一節脚注8)。杉山は、運動と感覚質とは、実在の方向としては全く自然に一致するはずである、と書く。そのことは全く正当である。しかし、ベルクソンがここで「その場で直ちに」結びつけるためだけに収縮という概念を持ち出すわけでは必ずしもないのではないか。そして、純粹知覚理論を貫徹するならば数的同一性を見出すべきはずのところ、むしろ途方もない数的なギャップを見出すベルクソンにこそ、われわれは着目する。

参考文献

- Deleuze,Gilles[1966/2004]*Le bergsonisme*, PUF, Quadrige/檜垣立哉・小林卓也訳『ベルクソニズム』(法政大学出版局,2017)」
- 岡嶋隆佑[2016]「ベルクソンの時間意識論 『意識の直接与件についての試論』から『物質と記憶』へ」,『筑波哲学』第24号,25-38
- 杉山直樹[2006]『ベルクソン 聴診する経験論』(創文社)
- 平井靖史[2016]「現在の厚みとは何か? ベルクソンの二重知覚システムと時間存在論」『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する 現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続』,書肆心水,175-203

ベルクソンの著作の引用は以下のものから行った。また付記した邦訳を参考にしたが、翻訳を改めた箇所もある。[]は引用者による補足である。原文で強調されている箇所は引用中傍点で示している。

- Bergson,Henri [1896/2012] *Matière et mémoire*, PUF, Quadrige/田島節夫訳『物質と記憶』(白水社,1999)
- Bergson,Henri [1907/2016] *L'évolution créatrice*, PUF, Quadrige/合田正人・松井茂訳『創造的進化』(ちくま学芸文庫,2010)
- Bergson,Henri [1938/2009] *La pensée et le mouvant*, PUF, Quadrige/河野与一訳

『思想と動くもの』（岩波文庫,1998）

Bergson, Henri [1932/2016] *Les deux sources de la morale et de la religion*, PUF, Quadrige / 森口美都男訳『道徳と宗教の二つの源泉』（中公クラシックス, 2003）